

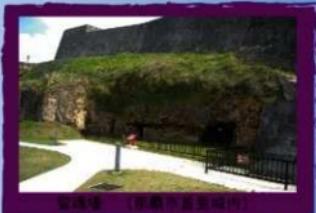


沖縄県立埋蔵文化財センター パネル展

生徒・学生と 共に学ぶ

令和元年
6月4日火▶6月30日日

- 港川小学校
- 西原高校
- 沖縄国際大学博物館ゼミ
- 読谷中学校
- 普天間高校
- 皆さんと共に企画展示しました



古崎塚（那覇市）主郭跡



小笠原家石垣の跡地（西原町）



美里小学校の奉安殿（沖縄市）



高教のトーチカ（宜野湾市）



比謝川沿いの特攻船密匿塹跡（読谷村）



小波津の陸揚場（西原町）

目 次

沖縄県の戦争遺跡	1
出前授業「戦争遺跡と遺物から沖縄戦を学ぶ」(浦添市立港川小学校6年生)	8
読谷村の戦争遺跡(読谷存立読谷中学校平和人権委員会3年生)	10
西原町の戦争遺跡(沖縄県立西原高等学校「沖縄の歴史」受講生)	17
嘉数のトーチカと普天間飛行場(沖縄県立普天間高等学校演劇部2・3年生)	20
戦争遺跡からみた沖縄戦と学生(沖縄国際大学総合文化学部博物館ゼミ)	22
遺物からみた沖縄戦時の学校と暮らし	27
おわりに—これからの平和学習と戦争遺跡	28
今回取り扱った戦争遺跡(地図)	29

ごあいさつ

アジア・太平洋戦争の中で激しい地上戦が繰り広げられた沖縄県には、現在も数多くの戦争遺跡が残されています。その保存・活用については、これまで平和学習の観点から常に注目されてきました。

全国的に、近代以降の戦争遺跡の注目は高く、広島県の「原爆ドーム」が1995年(平成7年)に国の史跡となり、1996年(平成8年)にはユネスコ世界遺産に登録されたことが契機となり、戦争遺跡を文化財として保存・活用する動きが広まっていきました。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、文化庁の補助を受けて平成22~26年度までの5か年にわたりて戦争遺跡詳細確認調査を実施しました。その結果、県内の戦争遺跡は1,077か所(平成27年現在)を数えています

その成果を踏まえて当センターでは、平成28年度から6月23日の慰靈の日に合わせて「沖縄県の戦争遺跡」展を開催しております。今年度は、「沖縄県の戦争遺跡 一生徒・学生とともに学ぶ」と題し、港川小学校、読谷中学校、西原高等学校、普天間高等学校、沖縄国際大学の各学校と連携し、戦争遺跡を通して、平和について学び、その学習の成果をパネルにまとめて展示・紹介する取組を行っております。

多くの県民の皆様に本展をご覧いただき、戦争遺跡の重要性が広く認識され、さらに保存・活用が図られるとともに、平和について考える機会となれば幸いです。

2019(令和元)年6月4日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 城田 久嗣

凡例

本誌は、浦添市立港川小学校、読谷村立読谷中学校、沖縄県立西原高等学校・普天間高等学校、沖縄国際大学の協力により実施した、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「沖縄県の戦争遺跡一生徒・学生と共に学ぶ」を補完するものとして、各学校の生徒・学生が提出したレポートをもとに当センターが編集したものです。

なお、掲載した図・写真的うち断りがないものは、当センターで作成・撮影したものです。

沖縄県の戦争遺跡

戦争遺跡とは

軍事施設や避難・被災した場所など戦争が残した、もしくは関連する様々な痕跡のことで、日本においては近代以降の戦争に伴う遺跡を対象として捉えられています。

沖縄県では、沖縄戦で住民が避難したガマ（壕）が代表的な戦争遺跡ですが、沖縄戦以前である近代の戦争遺跡もあります。本県の戦争遺跡の数は、2015（平成27）年度時点で1,077ヶ所確認されていますが、それ以前に失われたものや、まだ詳細に把握していないものも含めると、その数倍の戦争遺跡があったものと思われます。

沖縄戦の体験者が少なくなってきた今、これらの戦争遺跡は、沖縄戦の実相を継承し平和の大切さを学ぶための重要な遺跡です。今後、戦争遺跡を保存して文化財に指定されるなど将来に継承していくためには、県民皆さんの理解と協力を得ることが必要あります。そのためにも、戦争遺跡の詳細な調査や積極的な公開活用に取り組むことがとても大事です。

戦争遺跡がある場合は、足場が悪く危険な場所もあり、個人の所有地であるところも多いことから、見学や調査を行う場合は、各教育委員会や関係者などと調整・相談を行うようにしてください。

沖縄戦以前の戦争遺跡

1879（明治12）年、明治政府は軍隊と警察官を派遣して琉球藩を廃止し、沖縄県を設置した、いわゆる琉球処分が行われました。1894（明治27）年の日清戦争で、日本が勝利し台湾を領有するなど、沖縄は軍事上、重要な位置を占めることになり、様々な軍事関連施設が建てられました。海底線（電線）を陸上に掲げ、電気を通すための海底線陸揚げ室（石垣市崎枝、写真1）や、艦船の臨時的な補給を行う中城湾海軍需品支庫の水溜（じゅさんしき）（南城市佐敷、写真2）などがあります。

1904（明治37）年の日露戦争後には、海上の見張りを強化するために海軍望楼が西表（竹富町）、喜屋武（糸満市）に造られ、その施設の一部が残っています（写真3）。また同じ頃には、戦死した兵士を祀った忠魂碑（写真4）、天皇・皇后の写真（御真影）を保管する奉安殿などが、県内各地に建てられました。これらは、当時の沖縄県民の愛国心や戦意高揚を促したものであり、戦争遺跡として考えられています。

太平洋戦争が開戦する直前の1941（昭和16）年には、中城湾と西表島舟浮に臨時要塞が造られ、これは沖縄県で初めて戦闘に備えた軍事基地と言えます。この臨時要塞は、重要な港湾がある地域において海上と対空を警備するための砲台を中心とした小規模な軍事基地です。中城湾では勝連・佐敷半島周辺に、舟浮では西表島西部の各地に砲台跡などが残されています（写真5）。



写真1 崎枝の海底線陸揚げ室



写真2 佐敷の水溜 (中城湾海軍需品支庫)



写真3 西表島（左：遠景 右：建物跡）



写真4 座間味の忠魂碑（左：正面より 右：「海ゆかば」の刻銘）



写真5 伊計砲台（中城湾臨時要塞）



写真6 与那城の防空監視哨跡

太平洋戦争開戦後には、米軍などの戦闘機が日本周辺にも現われ、その早期発見のために全国各地で防空監視隊が結成され、その見張り所として防空監視哨らうしおが1943（昭和18）年に県内でも11ヶ所設置されました。これらは警察が管轄し、その監視は地域の在郷軍人などの有力者の下に、地元の生徒や役場職員などがあたり、警察署を通して監視で得られた情報を連絡したようです。その遺跡として、うるま市与那城、本部町、糸満市などに残っています（写真6）。

沖縄戦の戦争遺跡

沖縄戦は、米軍が慶良間諸島に上陸した1945（昭和20）年3月26日から、現在の嘉手納飛行場で米軍と降伏調印式を行った9月7日までと、一般的に捉えられています。戦闘の契機となったのは、日本軍が南西諸島防衛のため第32軍を創設した1944（昭和19）年3月22日と考えることができます。そこで、沖縄戦の戦争遺跡は、この日以降に構築もしくは使用されたもので、その

終焉は米軍上陸以降に各地に作られた民間人収容所と位置づけております。

本展示では、沖縄戦の戦争遺跡を「①日本軍の戦闘準備」「②住民・役場の防空対策」「③上陸戦のありさま」「④収容所そして戦後」という4つの視点から、それぞれ代表的なものを紹介します。

①日本軍の戦闘準備

1944年2月、米軍が日本軍の太平洋の拠点であるトラック諸島を急襲し、大本営は緊急に本土、南西諸島、台湾方面の防衛を強化する必要性に迫られました。そこで、同年3月22日に、南西諸島防衛のため航空作戦を準備する第32軍が創設されました。

当初は、飛行場建設が急ピッチで行われ、同時に海岸際での応戦を目的とした水際陣地が各地で造られました。しかし、6月には米軍による攻撃でサイパン、マリアナ諸島で多大な被害が見られたため、上陸戦も念頭に入れた防衛強化が必要とされました。その結果、7~9月にかけて第9・24・62師団などを沖縄本島へ、第28師団などを宮古島に配備するなど、第32軍の軍備を増強させることができました。しかし、12月には第9師団を台湾へ移動させたので、結果的にはその戦力は十分なものにはなりませんでした。

各部隊は、飛行場や水際陣地だけでなく、上陸戦を意識して司令部壕を始め、内陸部にも複雑な陣地壕、重火器による応戦を想定した数多くの砲台、船舶による特攻作戦のための特攻艇秘匿壕などを構築しました。当初、地上施設にあった陸軍や各師団の病院も、戦局が悪化し上陸戦が必至になると地下壕に移されることになりました。また、学生（学徒）も本格的に動員され、勉学どころではなく、陣地壕の構築などを手伝うほか、自らの避難壕も造りました。

これら上陸戦に備えた軍事施設について、現在戦争遺跡として確認されているものを種類ごとに特徴的なものを紹介します。

飛行場 既に建設されていた海軍の小禄・石垣島北（平喜名）・南大東島に加え、前年から行わっていた伊江島や沖縄北（読谷）など、最終的には18ヶ所の飛行場が造られました。確認されている遺跡の大半は掩体壕跡で、読谷村座喜味、石垣市大浜などに残っております（写真7）。小禄飛行場跡（那覇市）では那覇市教育委員会による大嶺村跡の発掘調査に伴って、礫と石粉（いわゆるイシゲー）で敷き固められた滑走路が部分的に確認されました（写真8）。

司令部壕 第32軍司令部壕は、当初、津嘉山（南風原町）に造られており、その一部で発掘調査が行われ、坑木で丁寧に造られた坑道が確認されました。しかし、軟質なクチャ層に築かれたため、10・10空襲以後に強度が不安視され、首里城の地下に移動しました。現在、壕内は崩落が激しいこともあります。詳細な調査が行えていません（写真9）。1945（昭和20）年5月下旬に司令部の撤退が決まり、最終的に摩文仁89高地（糸満市）の陣地壕に移動しました。



写真7 大浜の掩体壕（石垣島海軍南飛行場）



写真8 発掘調査で見つかった海軍小禄飛行場の滑走路（那覇市教育委員会 2012）

また、海軍司令部壕も、当初鏡水（那覇市）に造られたコンクリート製壕群から、10・10空襲以後に、米軍の上陸戦を意識したより強固な海軍司令部壕（豊見城市）に移動しました。

水際陣地 日本軍の防衛戦の基本方針は敵を海岸際に撃滅させる水際作戦であり、海岸沿いに銃眼やトーチカを配した陣地が南西諸島でも多く造されました。特に大東諸島には、各島の周囲に隙間なく陣地が配されており、遺跡として3ヶ所確認しました。ここでは、日本軍などの記録資料も多く残されており、攻撃方向や配備兵器などの戦略を具体的に把握することができます（写真10）。

特攻艇秘匿壕 太平洋戦争では、小型船舶で敵艦に体当たりする特攻作戦が採用され、沖縄戦を含め準備されていた本土決戦でも、その特攻艇を秘匿する壕が多く造られました。その形態は、長さ10～20m、幅・高さ2～3mの人工壕を基本とし、数10mの間隔を空けて複数造られることが多かったようです。本島西海岸、慶良間諸島、宮古・石垣の海岸に多く造られたようです。特に宮古島市狩俣のものは、6基の壕を連結させた複雑な形態をしています（写真11）。

②住民・役場の防空対策

沖縄県では、第32軍配備前後から警察などの指導により住民も屋敷地に防空壕を設けたりしていました。しかしながら、積極的に防空壕を構築したり、自然洞穴などに避難場所を定めたりしたのは、10・10空襲以後とされます。また、県庁や各役場でもその頃に書類保管や避難のため、または御真影を保管する壕などが構築され始めました。



写真9 第32軍首里司令部壕入口



写真10 南大東島万座毛の銃眼

(上：遠景 下：内部から海岸)



写真11 狩俣ヌーザランミの特攻艇秘匿壕群



写真12 前川の防空壕群

防空壕 屋敷地に掘られたものとしては、普天間飛行場建設時に接收された神山古集落の発掘調査により、屋敷地の隅に掘られた防空壕が発見されています。水・食糧等の貯蔵のためと思われる沖縄産陶器（荒焼）壺が多く見られます。当時、このような防空壕の掘削を請け負う人がいたという話もあります。

一方、親族や集落単位で掘削されたと考えられる複数の防空壕が集中して造られたところもあります。例として、根路銘（大宜味村）、前川・山川（南城市・八重瀬町 写真12）のものなどは、谷部や川岸斜面に立ち並ぶように掘られており、全長10m前後、入口が2か所で平面コ字形のものを基本としたものです。ただ、後者は壕内に多くの棚や壁を支える坑木穴があるなど、日本軍の陣地壕に近い構造とも見られ、軍の使用や関与の可能性も考えられます。

その他、ハンセン病（当時「らい病」「レプラ」といった）患者施設であった愛楽園（名護市屋我地島）では、大規模な防空壕群が残っております。これは、当時の所長が入園者に命令し構築させたもので、非常につらい作業であったそうです。坑道幅・高さも2m近くで広々としており、坑木で補強された様子や、壁面に大きな鉄釘が何本も刺さっているなど、おそらく軍の技術や資材が提供されたものと考えられます（写真13）。

官公庁壕 県庁・警察部壕は、詳細な構築時期がはっきりしませんが、1945年に入って第32軍司令部が置かれた首里城の近くに計画され、繁多川のシッポウジヌガマに構築されました。自然洞穴とそれに繋がる坑道があり、水溜もあります。ただ、上陸戦が始まても構築途中であったため、知事が移動してきたのは4月25日とされています（写真14）。

各地に役場壕がありますが、後ほど紹介します旧西原村役場壕は、沖縄県で1985（昭和60）年に最初に考古学的な発掘調査が行われた戦争遺跡です。

御真影奉護壕 10・10空襲以後、学校の奉安殿などで保管されていた御真影（天皇・皇后の写真）



写真13 愛楽園の防空壕群



写真14 県庁・警察部壕 (シッポウジヌガマ)



写真15 大温带の御真影奉護壕 (左: 壕へ至る道の入口 右: 内部…黒い土はコウモリの糞)



を避難する必要に迫られました。そこで、県は本島北部の大温帯に奉護壕を構築し、1945年1月より各地の御真影が集められたようです（写真15）。

③上陸戦のありさま

1945年2月には、硫黄島で日本軍は米軍に敗戦し、米軍の沖縄への上陸戦は必至となりました。3月に入ると南西諸島への空襲が激しくなり、23日ごろには本島周辺で艦砲射撃も始まりました。住民は、防空壕だけでなく自然洞穴や山間部に避難することになりました。日本軍は持久戦を図るために、各地にあった橋を自ら爆破するなど使えないようにして、米軍の進攻を少しでも遅らせようとしたしました。

米軍は3月26日に慶良間諸島へ上陸し順次占領を行い、4月1日には本島中部西海岸に上陸し、南北に分断し進攻しました。4月後半まで、宜野湾・浦添・西原一帯で日米軍の激しい攻防が続くなか、北部の本部半島や伊江島は制圧されました。5月に入って日本軍の総攻撃が失敗し、5月末には第32軍司令部が南部の摩文仁へ撤退したことにより、軍民混在の状況が生じ多大な被害が出ました。特に、沖縄陸軍病院南風原壕群など南部の幾つもの病院壕では、傷病兵は毒薬を飲ませられたり壕内に置き去りされるなど、また砲撃などで大勢の人が命を落としました。

6月には、海軍部隊が小禄で壊滅し、日本軍は最終的に本島最南端の喜屋武まで撤退し交戦しました。そして、23日には第32軍司令官・參謀長が自決することになり、日本軍の組織的戦闘は



写真16 にしやま 北山の陣地壕群



写真17 にしやま 北山の集団自決跡地碑



写真18 名蔵白水の住民避難地カマ跡



写真19 チビチリガマ



写真20 シムクガマ

終了したとされます。しかし、米軍の掃討戦は続き、住民は日本兵に虐殺や様々な横暴を受けたり、飢餓やマラリアなどに悩まされたり、各地で被害や苦難は続きました。

渡嘉敷島の戦争遺跡 渡嘉敷島には特攻艇を使用する海上挺身第3戦隊が配備されていましたが、^{にじゅま}3月26日の米軍上陸時には出撃せず、翌日には北山^{じゆざん}と呼ばれる島北部の山間部に移動し、大急ぎで陣地構築を行いました。それが北山の陣地壕跡群で、谷斜面に小規模な壕が掘られ、内部全体がカマドとなった壕も見られるなど、持久戦を意図した陣地と考えられます（写真16）。住民たちはこの陣地には日本軍により入ることができず、その北約1kmの奥まった谷地に移動し「集団自決」が行われたとされます（写真17）。また、生き残った住民も食糧難で苦しみましたが、陣地の日本兵の多くは武装解除を受けた8月24日には下山してきたようです。

各地の住民避難 住民の多くは、自然洞穴に避難しましたが、本島北部や石垣島などでは山間部にも避難し、石川岳（恩納村）や名蔵白水（石垣市）では掘立小屋やカマド跡などが残っています（写真18）。住民が避難した場所では、「集団自決」や日本兵による横暴・虐殺など様々な悲惨な状況が見られました。読谷村波平では、「集団自決」が行われたチビチリガマがある一方（写真19）、全員が生き延びたシムクガマもあります（写真20）。この違いの原因には様々な理由がありますが、前者は洞穴（ガマ）の面積が約600m²と大きくなく出入口も1ヶ所のみであったこと、後者は洞穴内に川が流れ全長2.5kmで出入口が複数見られるといった構造状の違いも影響したものと思われます。

④収容所そして戦後

米軍は、慶良間諸島上陸の3月26日に、南西諸島を軍政府の管理下に置くことを宣言しました。4月以降、占領が進んだ沖縄本島中北部を中心に収容所を造り、保護した住民や投降した日本兵を収容していました。収容所の遺跡としては、キャンプシュワブ内に大浦崎収容所跡が見られ、掘立小屋があった平場や通路などが確認されています（写真21）。この収容所では、主に今帰仁、本部、伊江島の人々が収容されていました（写真22）。

さらに米軍は、上陸戦を続けながら、占領した伊江島、嘉手納などにあった日本軍の飛行場を改修すると共に普天間など新たな飛行場も造り始め、日本本土への攻撃に備える準備をしました。そして8月には掃討戦がほぼ終了し、9月7日には南西諸島の日本軍と米軍の代表者により、嘉手納飛行場内において降伏文書の調印が行われました。

そして戦後70年現在、沖縄戦中に造られた飛行場などを含め米軍基地は未だに残り、沖縄県には本における米軍専用施設の7割が集中しており、その面積は県土の1割にもなります。

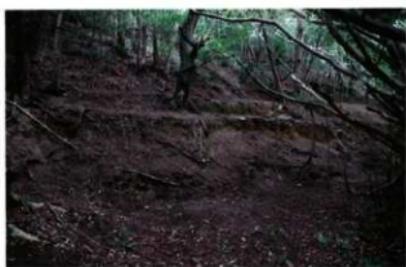


写真21 大浦崎収容所の建物跡地
(名護市教育委員会 2013)



写真22 大浦崎収容所の当時の様子
(今泊誌編集委員会 1994)

出前授業「戦争遺跡と遺物から沖縄戦を学ぶ」

浦添市立港川小学校6年生

6年生の皆さん（146名）、具志堅恵美子先生、友寄由香先生、草野一成先生、下地治人先生

港川小学校では、地域学習が熱心に行われていることを伺っており、5月21日に先生方の協力を得て6年生の皆さんに「戦争遺跡と遺物から沖縄戦を学ぶ」というテーマで出前授業を行いました。小学生を対象とした戦争遺跡の授業は初めてでしたので、どれだけ理解してもらえるか少し不安でした。

授業は、6年生を2グループに分けて1校時（45分）ずつ行いました。まず最初の30分で当センターで作成したスライドを用いて、沖縄県の戦争遺跡について概要を説明しました。残りの時間では、戦争に関する遺物を観察してもらう形で進めました。授業中、生徒の皆さんは熱心に話を聞き、遺物を手に取り戦争について深く考え、学んでいる様子が見られました。

今回初めて行った試みのため、色々改善や工夫をする必要がありますが、小学生に対して行っている沖縄の先史時代やグスク時代をメインにした展示解説や出前授業以上の手ごたえを感じることができました。

生徒たちの感想（抜粋）

「学習をする前は、「なんで昔のものなのに残しているんだろう」とか、「戦争のことは誰でも知っているのに戦争遺跡なんていらない」と思っていましたが、戦争遺跡は戦争を体験した人が少なくなると、かつて戦争があったという証拠になるということがわかった。」

「わたしは、これまで戦争のことはいろいろ調べたけれど、戦争遺跡には、目を向けませんでした。でも今日のこの授業を通じて、遺跡から戦争のころの人々は何をしていたのか、どんな道具を使っていたことなどが分かる重要なものだと分かりました。戦争のことを知っていくために、いろいろな遺跡を見てみたいです。」

先生方のコメント

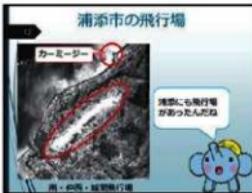
戦争遺跡が調査、記録され、文化財指定されるなどの保存活動は意義のあることです。今回は、地域に残る戦争遺跡を知ることだけでなく、その保存や活用を考えさせる問いを6年生に投げかけられた点で、さらに重要な学習になりました。平和な社会や世界を作る具体的な活動の一つとして、戦争遺跡の調査や学習の重要性を感じることができました。



プロジェクターを使った戦争遺跡の説明



沖縄戦時の遺物を観察する港川小学校生



出前授業で使用したスライド「戦争遺跡と遺物から沖縄戦を学ぶ」(一部)

沖縄戦のこと

外から見た穴 中から見た穴

左の写真は、**水際陣地**という所です。船から下りて上陸するときは、一番時間がかかるそうです。なので、岩にあけた穴から敵軍が上陸するところを見るためです。これは、上陸する前を攻撃するための基地だったのです。

これは、**特攻隊**が置かれていた場所です。どのように使うかというと特攻隊には人がばくじんと一緒にのってそのまま軍艦にぶつかっていきます。でも、この方法は特攻隊にのっていた人は死んでしまうのです。

特攻艇秘密陣地

右の写真は、**特攻艇**のもので、沖縄の海岸沿いに作られた秘密陣地です。特攻艇は、一人が爆弾を積んで島間に向かうる小さい舟のやつです。

感想

私は、戦争遺跡のことを教えてもらったり、沖縄戦のことが分かりました。戦争遺跡からできものを実際に見て、触れて、戦争も大変だったことが分かりました。でも、タケをぞうりにしたり、工夫していくすごいと思いました。これからは、もっと戦争について学び、平和にしていきたいです。

読谷村の戦争遺跡

読谷中学校平和人権委員会3年生

雨瀬萌乃さん、上地 心さん、神谷琉空さん、兼謝名彩音さん、玉城小梅さん、玉城小百梨さん、知花久鈴愛さん、古堅舞花さん、山内瑠奈さん、友利実優さん 宮城美律先生

読谷中学校では、生徒自身が運営する平和人権委員会があり、これまでにも積極的に平和学習を行っておられました。今回の企画にびったりと思い相談したところ、宮城美律先生を中心に平和人権委員会のメンバーに参加していただきました。

ゴールデンウィークの最終日、5月6日午後に皆さんと読谷村内の4つの戦争遺跡を巡りました。皆さん初めてのところも多く、非常に興味津々でした。その後、各自でレポートを取り組んで自ら参考文献を探したり、6日に行けなかった楚辺の砲台に出かけたり熱心に取り組んでいただきました。提出されたレポートはこちらで少し手を入れましたが、かなりしっかり調べていただきました。

沖縄戦時の読谷村（旧・読谷山村）

戦前の読谷村　当時の読谷村には約1万8千人が住んでいました。古くからサトウキビとサツマイモの一大産地でサトウキビでは病害虫に強く多収量の「読谷山種」、サツマイモでは品種改良した「佐久川」や「暗川」^{くらがい}を生み出すなど農業では進取の気質を持つ村でした。また、農業のかたわら長浜や瀬名波などの8集落では漁業が行われており、特に宇座は鰐漁が盛んでした。比謝磯は、山原船が接岸する比謝川港がありました。徳之島などから運ばれてくる牛の陸揚げ場もあり、牛市が開かれ比謝磯集落では商業が発達していました。

1944（昭和19）年7月、南西諸島へのアメリカ軍の進攻が必至となり、日本政府は戦闘の足手まといとなる老幼婦女子、約7万5千人を県外へ疎開させました。8月には、古堅国民学校から89人が対馬丸にのり九州に行きました。また、住民は日本軍の飛行場等構築の労働、軍隊への食糧供出に加え防衛隊・学徒隊・女子挺身隊など軍隊一体の戦闘協力が強制されました。

読谷村には1945（昭和20）年2月、国頭への退去の命令がでていましたが、艦砲射撃が激しくなった3月下旬、村民はあわてて荷造りをして国頭に避難し始めました。しかし、各字のガマや亀甲墓などに隠れ、読谷村に残った人たちも少なくありませんでした。米軍は沖縄本島上陸前におよそ4万発以上の砲弾をうちこみました。

米軍の上陸と読谷村　米軍は4月1日、本島西海岸の読谷・北谷の浜から上陸を開始しました。



砲弾運びをする女性



鉄の暴風

渡貝知、楚辺、都屋などの村内西海岸から進攻し、捕虜収容所、難民収容所、病院などを設けました。日本軍用地買取指令を村役場に出して、用地内に住居を構えている 78 戸は強制立ち退きさせられました。多くの村民は、家や財産の執着、墳墓の地への愛着などで、村内にとどまり壕や自然洞窟に避難しました。3月 23 日から空襲が始まり、25 日には一段と強さをまし、夕方になると、日本軍からほかに避難するよう命令が出されました。慌てて国頭方面を目指して避難したが、それでもまだ、各字の洞窟などに隠れている人も多くいました。

沖縄戦において、読谷村では 3924 人が犠牲になりました。米軍に身柄を確保された人々は収容所で暮らし、雨露をしのぐだけのテント小屋に押し込められ、わずかな食糧と地面に枯れ葉をしいただけで過ごさなければならず、栄養失調やマラリアなどの病気で亡くなる人も多かったようです。

戦後の読谷村 読谷村では、戦前には日本軍が北飛行場を建設しており、米軍も上陸後すぐに基地建設を始めて、村の全域は自由に使用することはできない状況でした。戦後、村民は自分たちの村へ帰ることができませんでした。村民は 1 日でも早く自分の村に帰れるよう粘り強く嘆願しました。その後住民の嘆願などにより村民がはじめて帰ることを許可されたのが波平・高志保の一部地域で実に村土のたった 5% にすぎなかったのです。読谷村の戦後は、米軍基地返還の戦いの始まりでもあったのです。

収容所にいる人々の中には、いわゆる軍作業に従事することもありました。軍作業は、米軍が収容所にいる人々に対して道路工事や荷下ろしの作業をさせたことが始まりと言われています。また、米軍に占拠された村では演習中の事故や落下事故が起きました。1965（昭和 40）年には自宅の庭で遊んでいた女の子が落下したトレーラーに押しつぶされ亡くなりました。それでも事故は繰り返され被害は続きました。

そのような苦難の中で、読谷村民は平和憲法理念を掲げ基地撤去の戦いを続けました。その後次々と基地は返還され戦争で失われた緑を復活させ、公園をつくりました。こうした、村民の粘り強い活動により今の読谷村が築かれていったのです。

※本項は、読谷村役場 2003 や読谷村 HP 内の読谷バーチャル平和資料館 (<http://heiwa.yomitan.jp>) を参考。なお、図・写真の出典は同 HP より。



米軍による読谷村の
土地占領の様子



落としたトレーラー

とや 都屋の砲台（読谷村都屋）

都屋の砲台は都屋漁港にあり、地元ではアブトウガマとも呼ばれています。なお、これまでトーチカ（ロシア語で鉄筋コンクリート製の防衛陣地を表す）と言われていましたが、最近の調査では大砲を置く砲台だとされています。

自然壕を利用しており、大砲を置いた開口部はコンクリートで固められています。この部分は段々とした金庫の様な造りで、70cmほどの屈んで入れる位の高さです。この開口部から海側に約5mの所に銃眼らしき穴があります。他に開口部が3ヶ所あり海と陸で繋がっていますが、現在ではほとんど埋まっており、危険防止のためか、故意に岩で埋められているところもあります。

現在では、砲台から見えた海も防波堤などで見えなくなっています。当時、日本軍では攻めてくるアメリカ軍をこのような海岸際に造った砲台などで迎え撃つ作戦を取ろうとしていたと言われています。しかし、この砲台は実際には使われていませんでした。

そべ 楚辺の砲台（読谷村楚辺）

楚辺の砲台は崖下の洞窟にあります。楚辺海岸の岬の向こう側にはもう一つの砲台がある都屋漁港があります。

砲台の周囲は琉球石灰岩で浸食され、尖った岩になっています。洞窟の入口をコンクリートで塞いだ造りとなっており、都屋のトーチカと違い入口だけではなく、床もコンクリートで固められています。中は奥行きがわずか5mほどです。入口の右側のコンクリートには銃眼がつくられています。右側の奥は浅く自然なまま、手を加えたことはありません。外との間にある壁はコンクリートで厚さが40cmほどで、ブロックを積み上げた様な造りになっています

この砲台も実際には使われていた様子はありません。



都屋の砲台（上：大砲を出す開口部
下：説明する職員と読谷中生）



楚辺の砲台（上：遠景 下：入口）
このページの写真は宮城先生撮影

ひじゅ 比謝川沿いの特攻艇秘匿壕群 (読谷村字渡具知)

特攻艇秘匿壕とは、体当たりによる攻撃を行うための小特攻艇を秘匿する壕です。特攻艇というのは排水量 1.5 トンのペニヤ製のボートで軍用トラックのエンジンを積み、当初は 120 kg 機雷を 2 機積み密かに敵の船に近づき機雷を投下するという奇襲戦術の兵器で、敵艦に体当たりするものです。待ち伏せをする機雷や直線的にしか進めない当時の魚雷と異なり人員が搭乗して操縦するため、目標まで爆発物を確実に誘導することは可能ではあるが敵艦へ接近中に迎撃を受ける危険などもあります。しかし、戦局が悪化するにつれ船首に 250kg の爆薬を積んでそのまま敵艦に体当たりするという特攻作戦に切り換えられました。

壕の形態は、長さ約 10~20m、幅約 2~4m、高さ約 2~3m の直線的な壕が、一定の間隔を空けて数基構築されるもので、複数が連結するものもあります。立地は、海岸に面した丘陵に掘り込まれており、直接海側から見えないような位置、または偽装したりするものが多いです。米軍が自殺艇と呼んだ特攻艇は長さ 5.5m、幅 1.5m の木造合板で造られていました。

本島では米軍の上陸が予想された糸満、北谷、読谷、本島などに秘匿壕が造られ、特攻艇が配備されました。渡具知の特攻艇秘匿壕には、海上艇身隊第 29 戰隊第 1 中隊の 17 艘の特攻艇「震洋」が配備されていたと言われています。



比謝川沿いの特攻艇秘匿壕群

(上：遠景 中：壕入口 下：内部に入る読谷中生） 下の 2 枚は宮城先生撮影

鉄血勤皇農林隊（牧原）の壕（読谷村字牧原）

鉄血勤皇隊とは、太平洋戦争末期の沖縄県において、防衛召集により動員された学徒による少年兵部隊です。現在の嘉手納中学校にあった沖縄県立農林学校には、戦前は優秀な少年たちが通学しており、その姿は子供心にも憧れの的でもありました。しかし戦争が近づくと、勉学どころではなく、座喜味城跡の高射砲陣地、海岸沿いの戦車壕などの構築、軍事教練で明け暮れました。

1945（昭和 20）年 3 月 25 日、空爆により校舎が全焼しました。翌 26 日、何の法的根拠も無いまま現地召集兵として動員され、読谷山村牧原の壕に農林生 130 人が集まり、鉄血勤皇隊農林隊が編成されました。沖縄戦による、農林生の戦死者は 124 名にのぼります。

現在、鉄血勤皇農林隊の構築壕は、嘉手納にある道の駅の交差点を左折、しばらく行って嘉手納野球場前を通過して、左手の公園駐車場から、比謝川沿いに農道を下っていくと、突き当たりに岩肌にくぼみがみえる一帯にあります。壕自体は、草が生い茂っており、足元は非常に悪く周りからは見えにくかったです。現在は、崖下に高さ 50cm 位の壕口がいくつも開いています。壕口は 4ヶ所あり、そのうちの 2ヶ所はほとんど埋没しています。

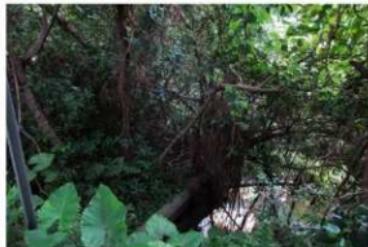


鉄血勤皇農林隊の壕（左：壕の入口 右：しっかりメモを取る読谷中生）共に宮城先生撮影

さかえぱい 榮橋（読谷村牧原）

榮橋は、沖縄戦以前にあった鉄筋コンクリート造りの橋です。現在の嘉手納町立屋良小学校前の通りを北に進みますと、比謝川の流れに達します。そこに架けられていた橋が「榮橋」で、読谷山村牧原と北谷村屋良を結んでいました。当時の榮橋は、全長 80m の大きな橋でした。ほぼ手作業で造った鉄筋コンクリートのこの大きな橋は、1931（昭和 6）年に完成しました。現在は、たもとから、20 m 付近で途切れてしまっています。橋が作られた当時の屋良には、製糖工場（沖縄製糖株式会社嘉手納工場）があり、サトウキビを運ぶ為に架けられました。サトウキビを運びやすくするためのレールが敷かれており、工場関係者や近隣住民にとって、大切な交通機関となりました。

しかし榮橋は、日本軍が敵の進撃速度を、遅延させるという目的から破壊されました。沖縄島では米軍上陸前後の 1945（昭和 20）年 3 月下旬から同年 4 月上旬の時期に破壊されたものが多く、現在では億首橋、天願橋、榮橋の 3か所が確認できます。戦前から、橋をみている人にとって、榮橋は、思い出深い場所だったそうです。その橋を日本軍が自ら爆破したので、そこにショックを受ける人も多かったのではないかでしょうか。あの美しい姿を誇っていた橋も戦争では「榮」えず、今では哀れな残骸をさらしています。



榮橋（左：当時の榮橋…説明板より 右：壊された橋の一部）右は宮城先生撮影

生徒たちの感想（抜粋）

「私は、この活動を通して、住んでいる読谷村でも初めて知る場所がほとんどでした。榮橋を調べてみてどうして、日本軍が自ら橋を壊してしまうのだろうと思いました。敵の侵略を遅くするのが目的だったけど、そうすると、自分たちの交通手段も限られてくるし、自分たちも苦しくなるんじゃないかなと思いました。でも、自分たちにとって大切な橋を壊すくらい上陸前から追い込まれていたのかなと思います。」（雨瀬萌乃）

「僕は小さい頃に、戦争体験をしたおじいちゃんから色々な話を聞くことがよくありました。小さかった頃の自分はまだ話の内容を理解できていなかったけど、今の自分は戦争の愚かさと、平和の大切さを理解できました。自分たちの地域にある戦跡から学び、家族や友達など身近な人から戦争の話を広げていけたらいいと思いました。」（上地 心）

「今回の平和学習では、今まで知らなかった読谷の戦跡について、その場所にゴミを捨てたり船を置いたりするなどの現状があるということがショックでした。沖縄戦について知らずに、亡くなつた方々の親族の心を傷つけてしまっている人達がいること、それを改善していくのは自分たち世代しか出来ないということを知ってほしい。」（神谷琉空）

「小学生のころから曾祖父に戦争の苦しさ、平和のありがたさについて、よく話を聞いていましたが、今回は沖縄全体ではなく、読谷村という1つの地域に目線を向けて人々の人口、産業、戦争時の避難場所や、住民は軍にどんな協力をしたのかなどを学ぶことができました。読谷村の壕は、月日が経つとともに壕の周りも汚れてきていたり、車などの大きなゴミも置かれていったりしているので、少しでも掃除したりと、戦争遺跡は大切に残していくべきだと思いました。」（兼謝名彩音）

「榮橋について詳しく調べました。とても立派な橋で、戦前に橋を使っていた人にとって大切なものであったと思います。そんな橋を日本軍は敵の侵略を遅らせるために壊しました。沖縄には大きい道路が少なく、交通事故ですぐに渋滞になってしまいます。大切な橋を壊すことで不便になる人もたくさんいるし、よく見ている場所がなくなると寂しい気持ちも出てくると思います。そんなことにならないように平和について考えないといけないと思いました。」（玉城小梅）

「私は中学1年生の時から平和について考えていたので、平和を伝える立場として頑張りたいと思ったので、2年生の時にこの平和人権委員会に入りました。慰靈の日がいつなのか分からない人、チビチリガマを知らない人が、思っていた以上にたくさんいて、「自分たちが戦争の悲惨さ、平和のありがたみを学んで、読中生のみんなに伝えていかなきゃ」と決心したのを覚えています。今回のフィールドワークで、戦争遺跡は身近で、意外な場所にあることがわかりました。私たちが体験者の話を受け継いで、たくさんの人に伝えていく、私たちが戦争遺跡を大切にして、次世代に繋いでいく、ということをやるべきだと思いました。」（玉城小百梨）

「いろいろな戦争遺跡に行ったことがあります、ヘルメットを被らないといけないような比謝川沿いの特攻艇秘匿壕は初めてでした。中と外の気温差がすごくて、寒い、暑いの気温差というよりも中の空気はなぜかぞっとするような寒さでした。特攻艇で敵に突っ込んでいった兵士は突っ込む瞬間、敵の軍に突っ込めと言われた瞬間、どのような感情だったのでしょうか。その兵士に命令した指揮官は、その人の命をどう考えていたのでしょうか。それとも、指示したくてしたわけじゃないのでしょうか。歴史は、語り継がれないといつかは消えてしまう。消えてしまった時に戦争を起こすようなことないように、一人でも一分でも「平和・戦争」について考えることが大切なことです。考えて残していくことで繋がれていく平和を次の世代、時代へ繋げていきたいです。」（知花久鈴愛）

「戦争遺跡を巡って感じたことは体験、経験しないとわからない事が、たくさんあるということです。特攻艇秘匿壕の中に入ると、外の空気とは違う冷たい空気が流れていて、電気をつけないと真っ暗な中でした。その壕は特攻艇を隠すために作られたものでしたが、今使われている船が壕の中におかれたりしていたので戦跡なのにちゃんと管理されていないのかなと悲しくなりました。読谷村にある戦争遺跡を次世代まで残す。自分たちに今できることを、気づき、考え、行動することが出来るといいなと思いました。」（古堅舞花）

「読谷村の戦争遺跡巡りをして、暗くてどんよりしている壕を色々な工夫を加えて手作業で1つ1つ掘ったものもあることなどがわかりました。また、当時の植民地だった朝鮮などから人を集め、戦時に使う壕を掘るために労働させていたことなどが改めて知りました。今回の戦争遺跡通りを通してみんなに伝えて改善していきたいことは、戦争遺跡に現代の船やタンクなどを置いていたり、ゴミを捨てられているこの現状を伝えて改善していきたいです。」（山内瑠奈）

「今回4つの戦争遺跡をめぐり、普段通る道やよくみるとこでも初めて知った所があつて新しい発見がたくさんありました。今までチビチリガマとシムクガマの話はたくさん聞いてきたけど初めて行った場所についてもいろいろ教えてもらえたのでよかったです。戦跡の周りに車がおかれたりゴミがおちていたりしてまだきれいに整備されていないところもあることがわかりました。自分たちできれいにして戦争が残した跡をしっかり伝えていきたいです。」（友利実優）

先生のコメント

生徒の住む読谷村は、米軍上陸の地として、教えないほどの戦争遺跡が現存します。沖縄戦から74年。今、沖縄戦体験者が減っていくなかで、戦争遺跡は生徒たちに戦争の記憶を伝え、考えることができる歴史の事実を知る証だということを再認識をしました。ネットや書物では伝えることのできない事実を直にみて、肌の感じることのできる財産です。平和人権委員の生徒たちは平和を伝える一人として、自分たちにできること平和の尊さを戦争遺跡から知ることができたようです。

センター担当者のひとこと

読谷中の皆さんからゴミがあふれて放置されている現状への嘆きがみられ、我々文化財保存を仕事するものにとって、気が引き締められました。

西原町の戦争遺跡

西原高等学校「沖縄の歴史」受講生

伊波大道さん、大城飛雅さん、喜納拡之さん、島袋礼央さん、下里亮太さん、棚原快門さん、知念修斗さん、玉那朝立渡さん、玉那朝友佑さん、野原蒼真さん、屋良洋花さん、與那嶺祝詞さん、藤井 智先生

沖縄県立埋蔵文化財センターがある西原町（旧西原村）では、沖縄県で初めて発掘調査が行われた旧西原村役場壕などもあるので、町内の学校と戦争遺跡についての学習を計画したところ、西原高等学校からご協力をいただきました。

平成30年4月22日5・6校時に藤井先生が担当する「沖縄の歴史」を受講している2年生の11人に、沖縄県の戦争遺跡についての説明を行い、西原町の戦争遺跡の現地見学をしました。また、現地見学については、西原町文化課職員の山田浩昌さんから説明していただきました。そして、西原高校生には見学した戦争遺跡についてレポートを書いてもらいました。そのレポートを元に当センターで文章を整え写真を加えて、西原町内の3つの戦争遺跡について説明しております。

旧西原村役場壕（西原町字翁長）

旧西原村役場の近くに役場壕があり、太平洋戦争が激化してきた1944（昭和19）年6月頃から使われていました。その役割は、重要書類の保管と、役場職員の避難のためでした。

壕には入口が2ヶ所あり、中の広さは40m²、奥行き4m、幅8m、高さは低いところで1.5mですが、地盤が砂岩でもろいため大きく崩れているところもあります。落盤を防止するために2本の柱を残して造られています。入口付近にはロウソク等の灯り置場が1ヶ所設けられていました。

壕内には戸籍簿、土地台帳、図面、兵籍簿などの書類のほか、公金、出納簿、戦時債券、公印などを収納した重さ1トンの金庫も置かれていたとのことです。

1985（昭和60）年の西原町教育委員会による発掘調査では、人骨片、砲弾の薬莢、ジュラルミン製水筒・飯ごう、鉄製コップ、沖縄産陶器、本土産陶磁器、金庫の扉が出土しました。

なお、近くには西原の塔があり、戦争でなくなった村民、軍人などの慰靈のために造られました。



旧西原村役場壕（左：現状 右：壕内部）

小波津の陣地壕（西原町字小波津）

陣地壕は、南側に開口しており平面は「U」字状ですが、2ヶ所あったと思われる入口の一つは落盤のため現在は埋まっています。

民間の墓を利用し、第3紀砂岩（ニービ）層をくりぬいて構築されています。入口正面は、墓室正面

と庭をそのまま利用しているため、外観は左右に見られる掘り込み墓と似ています。

入口付近は幅 1.7 m、高さ 1.2 m で、大人がしゃがみ込みながらすれ違うことができる程度の規模です。また、壕内の壁面には落盤を防ぐための杭木をはめ込んだ跡が確認できます。

小波津では 1944（昭和 19）年の十・十空襲以後、独立歩兵第 11 大隊の第 3・11 中隊が配備されていました。第 11 中隊の本部が西原国民学校にあったことから、学校に近い小波津集落の瓦葺きで大きな家は、兵舎として利用されていたそうです。この陣地壕は野戦重砲という大砲をおくための陣地と見られ、独立重砲兵第 100 大隊が使用していたとのことです。



小波津の陣地壕（左：壕入口 右：壕内部）



こはつ 小波津家石塀の弾痕（西原町小波津）

小波津集落の小波津家の石塀には沖縄戦時の弾痕があり、特に連続した着弾痕が目を引きました。この弾痕は生々しく、沖縄戦の悲惨さを無言で語っています。沖縄戦前には、小波津家は日本軍の宿舎となっていたそうです。

この石塀は 1935 年に新築する際に共に作られたようです。石は厚さ 20cm、縦 30cm、横 150 ~ 250cm の大きさのもので 7 段も積まれていましたが、現在では敷地自体が盛土され、2 段分は埋まっています。かつては、砲弾自体が埋まっていたそうですが、それは戦後のスクラップブームで売りつくされたそうです。

説明板には米軍の艦船から攻撃を受けたと書かれていましたが、現在残っている弾痕は海側ではない北面する石塀があるので、上陸戦による攻撃を受けた可能性があると思います。なお、現在のライフル弾は 5 ~ 7 mm の大きさであるので、この弾痕は数 cm に及ぶものなので、それより大きな銃で至近距離から攻撃したものかもしれません。



小波津家石塀の弾痕



沖縄戦時の日本軍榴弾砲（西原町中央公民館）

生徒たちの感想（抜粋）

「壕は民間人が避難するだけの目的で使用されていると思っていた。でも、色々調べてみてそうではないと分かって驚きました。」（下里亮太）

「西原に住む中で、西原の戦争に関わるものに対してあまり触れる事がなかつたので、勉強になりました。」（玉那霸友佑）

「今回の学習のためにインターネットなどでも調べたりして、沖縄戦についての理解が深まった。」（知念修斗）

先生のコメント（抜粋）

今回の沖縄県立埋蔵文化財センター企画の依頼を受けて、生徒達に参加の意思を確認したところ、生徒の反応が予想よりも良かった。そして、学習を行っていたいたが、生徒らが住んでいる西原町においてもこんなに戦争遺跡があるとは思ってもいなかった。また、この町が悲惨な戦場であったことも知らなかつた生徒は多いし、私も初めて知ったことがたくさんあった。弾痕跡は当時のままに残っており、大変驚いたことを覚えている。身近な民家にこのような弾痕が未だに残っていることは、平和学習として多くの子どもたちに見てもらいたいと願う。このような企画をどんどん高校生に体験させ、学ばせていけば平和を作る大人になるだろうと感じる。是非、今後も多くの企画に参加したい。

センター担当者のひとこと

生徒さんと戦争遺跡を巡って、それを展示にするのというのは今回初の試み。スライドだけでの説明ではどうしても難しくなってしまったが、弾痕を見た生徒さんは非常に興味をもってくれたのは嬉しかったです。



【参考資料】

神山古集落（宜野湾市）

出土弾丸・薬莢

沖縄戦で日米の戦闘があった神山古集落の発掘調査で米軍が使用したと思われる弾丸・薬莢が出土。小銃や機関銃の弾で、集落内の戦闘が実感される。



西原高校で戦争遺跡の解説する当センター職員



西原町役場職員による戦争遺跡の現地学習

嘉数のトーチカと普天間飛行場

普天間高等学校演劇部2・3年生

伊計飛洋さん、伊地美穂さん、神田一世さん、照屋怜音奈さん、西村美春さん、比嘉誠也さん、渡久地政士先生、久高健先生

T Vニュースなどで映される普天間飛行場の姿は、嘉数高台公園の展望台から撮影されたものが多いです。この嘉数は沖縄戦において日米の戦闘が激化していった緒戦の場で、同公園にはトーチカなどの戦争遺跡が残されています。

そこで、普天間高校の渡久地さんの協力を得て生徒さんの希望を募ったところ、演劇部6名の皆さんが今回の学習に参加していただきました。5月8日放課後に戦争遺跡の概説を行った後、同公園にある嘉数のトーチカの現地巡査に行きました。提出していただいたレポートを再構成させていただきました。

嘉数のトーチカ（宜野湾市嘉数）

嘉数では、1945（昭和20）年4月8～23日の16日間にわたって、南下してくる米軍とそれを防ごうとする日本軍の戦いが繰り広げられ、嘉数高地の戦いとして沖縄戦最大級の戦闘の一つともされています。両軍の間には大きな戦力差があったが、嘉数を中心とする日本軍の陣地はあらかじめ地形を利用して計画的に構築されていたものだったので、米軍はその攻略に手を焼いたとのことです。この戦闘での両軍の戦死傷者は日本軍64,000人、米軍24,000人であったとされます。

嘉数のトーチカは、嘉数高台公園にあり、見晴らしのいい高台に設置されています。トーチカは、外からみると穴の開いたコンクリートの柱のような形をしていました。出入り口は1ヶ所ですが、一部地中に埋まっており、現在は腹ばいになってやっと入れるくらいの大きさしかありません。出入り口の反対側には、銃眼と呼ばれる銃器を構えて敵を討つための穴が2ヶ所あり、北側の海側を望むことができます。トーチカの正面はコンクリートが碎かれ鉄筋がむき出しになっている部分もあり、ここで起こった戦いの激しさを物語っています。トーチカ内部に入ると、大人が5、6人は入れそうなくらいでした。また、銃眼の内側壁面には2ヶ所の窪みが設けられ、銃器を安定させて使用するための台座などが取り付けられた可能性も考えられます。



嘉数のトーチカ（左：トーチカ正面 右上：ヘルメットを被り内部に入る普天間高生

右下：内部）下の2枚は普天間高生撮影

普天間飛行場

嘉数高台公園からは、普天間飛行場の滑走路が良く見えます。

普天間飛行場が建設される前には、多くの泉があることから肥沃な畠地が多く営まれ、宜野湾・神山・新城という集落がありました。これらの集落は、沖縄本島の南部と北部を結ぶ街道沿いにみられ、当時はリュウキュウマツの並木道が続いていたそうです。特に宜野湾集落は宜野湾村の中心で多くの民家が立ち並び、街道沿いには郵便局、宜野湾国民学校、役場等の公共機関や商店などがあり賑わっていたようです。

米軍は嘉数の戦いなどを終えるとこれらの集落を占領し民間人を収容所に移すと、強制的に普天間飛行場の建設を始めました。1945年6月15日には重爆撃機専用の滑走路を完成させました。米軍は沖縄戦を繰り広げている中、日本本土などへの攻撃を目的とした飛行場を沖縄各地で造っていたのです。



1945年12月の普天間飛行場（国土地理院空中写真） 嘉数高台公園展望台より（上：普天間飛行場
下：海側を臨む）

生徒の感想（抜粋）

「今回の戦争遺跡見学で、わたしはじめて実際に戦闘が行われた跡を目撃した。トーチカや銃弾の跡は、事前学習以上の大さな衝撃を受けた。公園内の展望台からみた普天間飛行場はやはりひとりきわ目立っていた。基地問題については様々な意見があるが賛否に関わらず、まずは積極的に考えて自分の意見を持つことが大事だと改めて感じるきっかけになった学習だった。」（伊計飛洋）

先生のコメント（抜粋）

今回の平和学習は埋蔵文化財センターと連携という新しい試みでした。生徒が実際に戦争遺跡を訪れ、数名の男子生徒はヘルメットをかぶり、腹ばいになって、狭いトーチカに入り戦時中の兵士に思いを巡らせました。嘉数高台から普天間基地を眺め、飛び立つ戦闘機を見ながら沖縄の現状も確認できました。戦争遺跡を自分の足で歩き見聞きして感じ考える大変意義深い機会でした。

センター担当者のひとこと

皆さんは沖縄戦や戦争を題材とした演劇を考えておられて、その参考のために参加したとのことで、今後の活動が期待されます。

戦争遺跡からみた沖縄戦と学生

沖縄国際大学総合文化学部 博物館（宮城）ゼミ

上原 千佳さん、梅村 素子さん、宇良 彩華さん、大城 裕さん、川端 普斗さん、金城 翼さん、平良 花江さん、
平良 瑞美さん、高嶺 愛奈さん、仲尾 祐里奈さん、比嘉 玲奈さん、古堅 智恵美さん、宮城弘樹先生

沖縄国際大学は、普天間飛行場に隣接する大学で2004（平成16）年8月に校内に米軍ヘリが墜落するなど、学生の皆さんも戦争を常に肌で感じているものと思われます。今回、博物館ゼミを担当されている宮城先生の協力で、学生に関する戦争遺跡について展示に関わっていただきました。

まず4月15日に当センターより本展示の主旨と戦争遺跡の概説を行い、5月13日は留魂塚の現地見学、その他各自で学習を行っていただき、学生に関する戦争遺跡を題材として取り組んでもらいました。博物館学芸員を目指している大学生ならではのレポートの完成度で、文章の修整は最低限に留めています。

今回の調査にあたって

留魂塚、南風原陸軍病院塹、アプチラガマ、美里小学校の奉安殿の4つを沖縄国際大学の学生（宮城ゼミ）が、授業の一環として戦争遺跡について調べました。

4つの遺跡に共通するキーワードは「学生」です。私たちは、今当たり前のように机に向かい勉強し、友人と遊びにでかけ、時においしいものをお腹いっぱい食べることができます。しかし、戦争に向かう不穏な空気に包まれた小学校の校庭には奉安殿という建物がかつて存在し、沖縄戦下では学徒が沖縄戦に駆り出され過酷な環境下で看護にあたったことを、これらの戦争遺跡は教えてくれます。

今回、グループごとに実際に遺跡を訪れ、壁に残された銃弾の痕跡や、現場で教えていただいた証言などから戦争遺跡について知見を広げました。パネル制作をとおして改めて戦後世代の私たちが、沖縄戦の出来事について理解し、伝える事の重要性について考えさせられました。本企画展を通して、多くの方が遺跡を知るきっかけになれば幸いです。

美里小学校奉安殿（沖縄市知花）

奉安殿は、天皇・皇后の御真影（写真）と教育勅語を保管した建物です。

美里小学校の奉安殿は、1935（昭和10）年前後に美里尋常高等小学校敷地内に建立されました。各祭事の際には全校生徒と村の関係者は奉安殿前に整列し、校長が御真影と教育勅語を取り出

して、教育勅語を読み上げる間、参列者は頭を下げて聞き入っていたそうです。また、この前を通る時は帽子をとって最敬礼をっていました。

太平洋戦争後の1945（昭和20）年12月15日、GHQが「神道指令」を発令し、日本本土の奉安殿は、撤去されていきました。沖縄では「神道指令」は発令されませんでしたが、1946（昭和21）年9月3日、志喜屋民政府知事が沖縄本島の各市町村長に対して奉安殿を撤去するように通達



沖縄国際大学博物館ゼミ生の留魂塚見学

し、沖縄本島の奉安殿は破壊されていきました。戦後この一帯は、アメリカ軍がキャンプ・ヘーゲとして利用していましたため、ほぼ建立当時の状態で残っていました。

1977(昭和52)年の基地返還後は、忠魂碑と共に撤去する動きがあったのですが、歴史をしめす資料として撤去されず保存されました。なお、忠魂碑とは明治維新以降、日清戦争や日露戦争をはじめとする戦争や事変に出征し戦死した、地域出身の兵士の記念のために建立された記念碑のことです。

本奉安殿の特徴としては参堂・階段が設置され、鉄筋コンクリート製で屋根は切妻式の形をしているのが特徴で内部には漢字が書かれており、アメリカ軍が倉庫として利用していた痕跡があります。外壁には、戦時中に受けたと思われる弾丸の痕跡が残っており、現在でも確認できます。本土では、奉安殿に関する史料は多数ありますが、本奉安殿は証言のみで詳細な史料は現在のところ見つかっておりません。



りゅうこん 留魂塚（那覇市首里）

～最高司令部から共生共死を強いられた健兒たち～

沖縄師範学校男子部は1944(昭和19)年10・10空襲の被害を受け、翌年の年明けから第32軍司令部壕と並行し、退避用としての留魂塚の掘削を始めました。3月中旬には完成したとされ、吉田松陰の著書「留魂録」にちなんだ名称がつけられました。3月22日には第

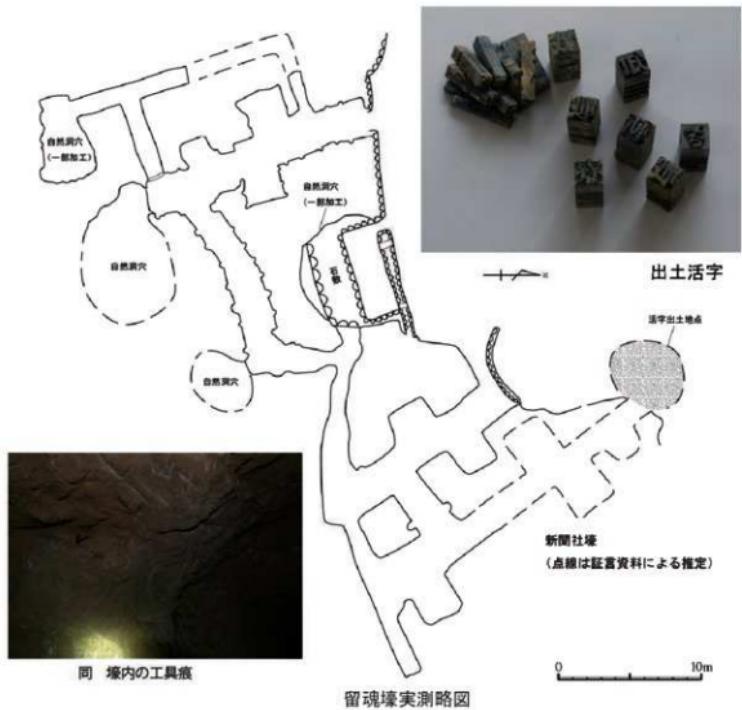
32軍司令部から鉄血勤皇隊編成の司令が伝達され、23日の大空襲を境に留魂塚に職員と生徒が集まり、31日に沖縄師範学校男子学徒386名からなる鉄血勤皇師範隊が結成されました。この塚は鉄血勤皇師範隊の生活の場となりました。ここでは様々な活動が行われ、軍司令部との連絡調整や水の運搬、食料調達、陣地構築作業だけにとどまらず、負傷者の病院への輸送や、住民の塹への宣伝活動や監視・指導までもが、彼らの任務となっていました。南部撤退が決まった5月下旬以降は、鉄血勤皇師範隊も留魂塚から離れ軍と共に南下し、糸満方面を目指したその道中で多くの学徒の命が犠牲となりました。

留魂塚の設置以前は、同所内の自然洞穴に石敷きを施し、中を広げ、沖縄神社の御神体や近隣学校の御真影を退避させたとされています。また、完成後の3月下旬には塚の東端を沖縄新報社が師範学校より譲り受け、塚内で新聞発行を行っていました。そこからは新聞発行で利用された沢山の活字が発見されています。

留魂塚は、首里城の物見台である「東(あがり)のアザナ」の城壁北側部分の石灰岩及び砂岩(二一ビ)を掘り込んで造られ、坑道は東西50m、南北20mの範囲で総延長130mの規模の学徒塹です。塹口は東西方向に4か所みられ、2か所は首里城公園内の無料エリアで公開されています。通路は基本幅1.8m、高さ1.5~1.8mで、通路の左右には2~3m四方の部屋が交互に2つか3つ付い

ています。壕内には坑木跡やツルハシ等の工具痕が残っています。

この壕は、沖縄戦において日本軍の中枢部隊であった第32軍司令部壕に隣接して設置された学徒壕であり、それは師範学校の優秀な生徒たちが日本軍によって危険な戦闘へ狩りだされ、若い命が顧みられなかったことを実証する重要な戦争遺跡となっています。



留魂塹の現状



自然洞穴部分の石敷

沖縄陸軍病院南風原壕群（南風原町字喜屋武）

～戦争の悲惨さを伝える生き証人～

本壕群は第32軍直属の陸軍病院として人工的に構築されました。南風原町の中央部東側に位置する標高85mの丘陵地（通称黄金森（クガニムイ））内に第1外科・第2外科壕群が所在します。病院壕内は縦、横が約2m、長さは約70mで21号、19号が南北に連結する坑道がありましたが、現在は崩落してみることができなくなっています。

1944（昭和19）年5月、熊本で第32軍の陸軍病院として沖縄陸軍病院が編成されました。6月から那覇市内で活動を始めましたが、同年3月末に空襲によって陸軍病院として利用していた南風原国民学校の校舎が消失し、第32軍野戦病院築城隊が10・10空襲以前に壕の構築を始めた黄金森と国民学校西側の丘陵地に病院を移動しました。

病院長以下、軍医、看護婦、衛生兵ら約350人に加え、沖縄師範学校女子部・県立第一高等学校的生徒（ひめゆり学徒）222人が教師に引率され、看護補助要員として病院壕に動員されました。また、壕の多くが構築途中のままで、南部撤退まで陸軍病院として使用されました。

壕内では麻酔なしによる患部の切断が多く行われ、ひめゆり学徒隊は非常に過酷な環境で看護に従事していました。南部撤退時には自力で逃げることのできない重症患者に対しては青酸を渡され、自決が強要されました。

沖縄陸軍病院南風原壕群は沖縄戦、特に日本軍の南部撤退後の戦況を語るための貴重な遺跡であり、当時の状況を追体験できる場所となっています。



沖縄陸軍病院南風原壕群内部



壕内で展示されている遺物

糸数壕（アブチラガマ・沖縄陸軍病院糸数分室壕）（南城市玉城字糸数）

～沖縄戦の実相を現在に伝える～

糸数壕は石灰岩製の自然洞穴でしたが1944（昭和19）年に第9師団が測量調査を行い、1945（昭和20）年2月に独立混成第44旅団工兵隊によって壕内の陣地整備がなされました。全長は約270mで、壕内の高さは1～10m、幅は広いところで20mを測るなど、病院壕の中でも最も大きな規模となっています。壕内には、カマド・戸門・空気孔の他に米軍からの防御整備として、地面から天井面にかけて積み上げられた石積みが数箇所設置されています。

同年3月23日米軍の上陸前の艦砲射撃が始まったため、糸数住民約200人がこの糸数壕へ避難しました。しかし、地上戦による負傷者が南風原陸軍病院では対応が困難になったため、5月1日には糸数壕も「糸数分室」として利用されることになりました。壕内には軍医3人、看護婦3人、

衛生兵7,8人、ひめゆり学徒隊16人、引率教員1人などわずか30人前後が動員され、600～1000人もの負傷兵の看護を行いました。壕内は電灯が撤去されたため、ろうそくの灯りで行手当てを行なわなくてはいけないうえに、医療品の不足や不十分な体制など、壕内は臭気に満ち、過酷かつ劣悪な環境でした。このように、糸数壕には日本軍と民間人の混在状態が3月～9月の間続いていました。その中で、民間人の避難が許された場所は最も危険とされていた壕の入り口付近であったということから、糸数壕は軍と民間との力関係を顕著に表すものと考えられます。

現在では、当時の玉城村（現南城市）によって南部観光総合センターが設置され、壕の見学案内が行われています。近年は県外からの修学旅行生を含む年間約11万人が訪れ、平和学習の場として活用されています。



糸数壕（左：入口 右：内部）

学生たちの感想（抜粋）

「今まで戦争に関する企画展に足を運んだことはあるが、こうして自分自身が展示用のパネルを作成するために様々な文献を読んだり、実際に遺跡に行き現場の空気を感じたり、今までとは違う形で戦争について学ぶことができ、とても新鮮だったと思う。」

「天皇の御真影に参列者は頭を下げるなど、今の日本では考えられない光景だなと感じました。当時の天皇やマスメディアなどが影響力をもっていたことが恐怖を覚えます。」

「心身共に休まることのない環境に、当時は自分よりも年下の学生たちが何ヶ月も居たのだろうと考えると悲しくて悲しくて涙があふれそうでした。遺跡に足を運び、話を聞くというのはとても大事だなと実感しました。」

「調査した部分を多くの人に伝えようとした時に分かりやすく伝えるための言葉の表現の難しさを感じました。特に専門用語や一般に使用しないものも多く苦労しました。」

「学芸員とは何かを考えることができました。その展示にはどういう意味があるのか、何を伝えられるのかを考えるのが学芸員で、教育のような役割もあることを実感しました。」

先生のコメント（抜粋）

沖縄国際大学では、県内でも最も早く1992年に旧・文部省から博物館課程の認可を受け、博物館学芸員に力を入れてきました。大学独自のプログラムとして（通称）博物館ゼミを開講し、学内の展示会を目指して学びを深めています。今回は、学生が自ら学び、足を運んで調べ、文章を作成し、パネル製作などに参加させていただきました。学生にとっては、本企画展の参加をおいて多くの事を学ぶ機会を与えていただけた機会になったものと思っております。特に戦争遺跡は、戦時中に自分たちと同じ世代に起こった出来事として、改めて平和の尊さを考える機会になったものと思います。

遺物からみた沖縄戦時の学校と暮らし

沖縄県内の遺跡から出土する遺物の中に、戦前から沖縄戦時にかけての学校で使われた、文具やその他さまざまな道具が発掘されています。

文具 沖縄県では1879(明治12)年の琉球処分とともに明治政府から学制及び教育令が導入されることで近代教育が始まりました。このため、県内で出土する文具は日本製品が圧倒的な数を占めます。その中には硯の背面に児童の名前が刻まれるものも出土しております。特に女児の名前のものがあることは、日本から導入された教育制度によって初めて女性が識字教育を受けるようになったこと(勝方=稻福2016)を物語る資料です。

学校を取り巻く遺物 文具以外にも、学生服のボタンや学校で用いられた陶磁器、当時の民間信仰を示す人形などが発掘されています。特に天神人形の存在は、沖縄にも天神信仰が伝わっていたことを示しています。

遊具 子どもたちが遊ぶ姿を映し出す遺物も出土しています。近世から変わらず使われている遊具には、泥面子やままごと遊びに使われた生活道具のミニチュア品などが挙げられます。一方で近代になって出現するのが、ガラスやプラスチック製の玩具で、遺跡からは残りやすいガラス製のおはじきやビー玉なども出土しています。工業生産が始まった近代を反映した遊具といえるでしょう。

文具

石筆は石盤に書く道具。硯は近代になって出土数が増加する(大堀2013)。インクボトルやセルロイド製の文具は近代の工業化に伴って出現した。



学校を取り巻く遺物

手前左から中は学生服のボタンで白いものは戦中の金属不足に陥った際の陶器製のもの。前列右の天神人形は、児童の学問成就を願って置かれた。奥の陶器碗の「師」銘は、首里城内にあった沖縄師範学校を示す。



近世以来のままごと遊びのミニチュア製品、今の面子の原型となった泥面子がある一方で、近代にはガラス製のおはじきやビー玉も出土するようにな。

あわりに－これからの平和学習と戦争遺跡

当センターでは、これまで沖縄県内の戦争遺跡の分布や現状を把握する調査を行ってきており、その成果を県民の皆様に公開する目的で、2016（平成28）年より慰霊の日に合わせて6月に企画展『沖縄県の戦争遺跡』を実施してきました。

沖縄戦を経験した本県において、戦争体験者が減少する中で戦争遺跡は沖縄戦を継承し、平和について学び考えるために非常に重要なものです。そして、このような平和学習は未来を担う生徒・学生と共に学んでいくことが大事なことだと思います。そこで今回は、当センター職員が学校の生徒・学生、そして先生方と一緒に戦争遺跡を巡り、みて感じたことを展示に反映できないかと考えて、準備を進めてまいりました。

ただ、当センターでは戦争遺跡の現状を確認し、その規模や材料、造りかたなどは通常の考古学的な手法で観察・記録をして説明することはできますが、戦争体験者や平和ガイドの方々と比べると、その理解や説明は表面的にしか過ぎないかもしれません。また、県史や市町村史などに記される沖縄戦の証言は膨大で衝撃的な内容もみられ、読み込むには労力だけでなく気力もいります。

しかし、まずはそれほど氣を負わずに身近な戦争遺跡を自分たちで巡って体感し考えることも大切だと思います。また戦争遺跡がある場所は安全面が不十分で危険なところも多いですが、今回取り上げたように比較的行きやすいところもあります。当センターや各教育委員会と学校が連携することで、戦争遺跡を活用した平和学習がより積極的に行えるのではないかと思います。

最後に御協力いただいた学校、生徒、先生ほか関係者の皆様に感謝を申し上げ、今後とも当センターではこのような戦争遺跡を活用した企画や学習にも取り組んでいかなければと考えております。

【参考・引用及び戦争遺跡を学ぶための文献】

今泊誌編集委員会 1994『今泊誌』

大堀皓平 2013「沖縄の遺跡から出土する石製硯について—沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料より—」『南島考古』第32号 沖縄考古学会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（II）一中部編一』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡－平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書一』

沖縄県教育庁文化財課資料編集班 2017『沖縄県史各論編6 沖縄戦』

勝方＝稲福恵子 2016『第一章 「読む女・書く女」の出現』『沖縄県史各論編8 女性史』沖縄県教育委員会
十菱駿武・菊池実編 2002『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房

十菱駿武・菊池実編 2003『続しらべる戦争遺跡の事典』柏書房

戦争遺跡保存全国ネットワーク編 2003『戦争遺跡から学ぶ』

名護市教育委員会 2013『市内遺跡詳細分布調査報告書1－キャンプ・シュワブ内文化財調査報告書』

那覇市教育委員会 2012『那覇空港内大嵐地区埋蔵文化財分布調査報告』

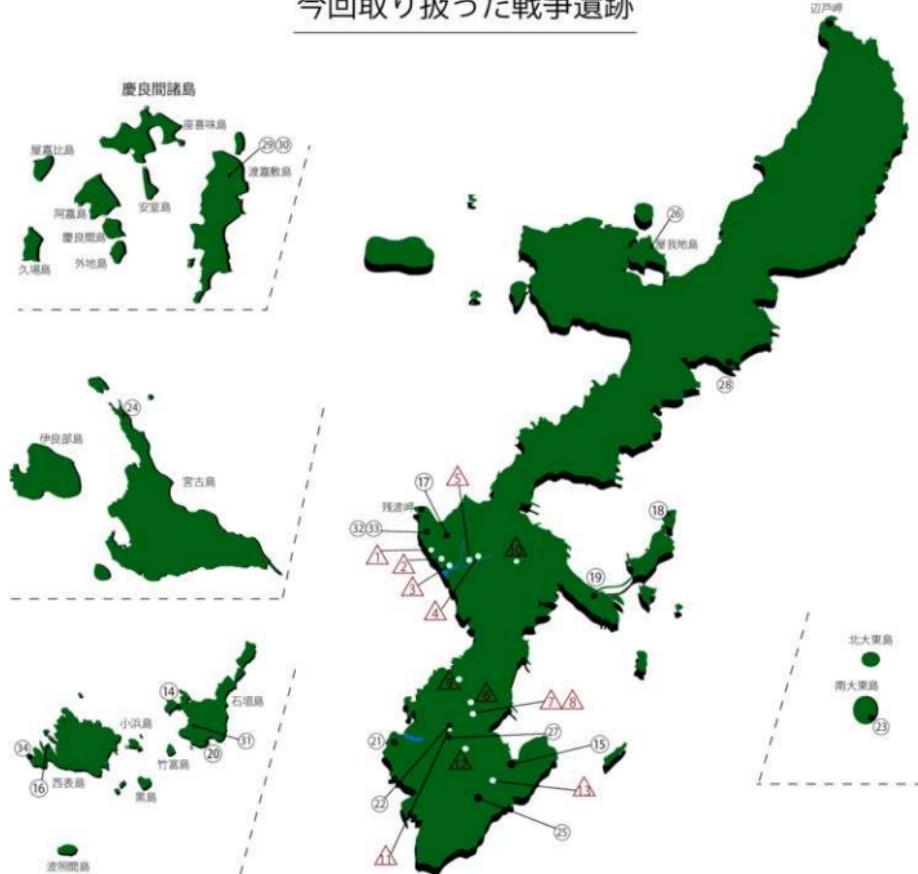
藤原彰編 1987『沖縄戦 国土が戦場になったとき』青木書店

吉浜忍編 2010『沖縄陸軍病院南風原壕』高文研

吉浜忍 2017『沖縄の戦争遺跡 <記憶>を未来につなげる』吉川弘文館

読谷村役場 2003『読谷村の戦跡めぐり』

今回取り扱った戦争遺跡



生徒・学生と共に調査した遺跡

△都心の砲台（諫早市）	△榮橋（諫早市）	△嘉数高台のトーチカ（宜野湾市）	△糸敷塹（南城市）
△辺りの砲台（諫早市）	△旧西原村役場跡（西原町）	△美里小学校の奉安殿（沖縄市）	
△比謝川沿いの特攻艇施設跡群（諫早市）	△小波津の陣地跡（西原町）	△糸敷塹（那覇市）	
△鉄血勤皇農林隊（諫早市）	△小波津家石垣の弾痕（西原町）	△沖縄陸軍病院南風原塙跡（南風原町）	

その他の本展で取り扱っている遺跡

◎崎枝の海底陸防掘削室（石垣市）	◎大浜の掩体壕（石垣市）	◎要塞園の防空壕跡群（名護市）	◎チビチリガマ（諫早市）
◎佐敷の水灌（南城市）	◎小浜飛行場（那覇市）	◎シッポウジヌガマ（那覇市）	◎シムクガマ（諫早市）
◎西表壁壘（竹富町）	◎第32軍首里司令部塙（那覇市）	◎大灌渠の御真影奉護塙（名護市）	◎大浦崎収容所跡（名護市）
◎座間味の忠魂碑（座間味村）	◎万座毛の砲眼（南大東村）	◎北山の陣地跡（波嘉敷村）	
◎伊計島のまるま（うるま市）	◎沖保ヌグランミの特攻艇施設跡群（宮古島市）	◎北山の集団自殺跡碑（波嘉敷村）	
◎与那城の防空監視哨（うるま市）	◎前川の防空塙跡（南城市）	◎名嘉白水の生尻避難地（石垣市）	



関連講座

第78回文化講座「みんなで学ぼう戦争遺跡」

日時:6月29日 14:00~16:00

場所:当センター研修室

発表者:当センター職員

生徒・学生の皆さん

次回の催し

「発掘調査速報2019」

日時:7月30日~9月1日 9:00~17:00

(入所は16:30まで)

関連講座

第79回文化講座「発掘調査速報2019」

日時:8月10日 開講13:30

(13:00開場・受付)

場所:当センター研修室

予約不要・参加費無料 先着140名

沖縄県立埋蔵文化財センター

令和元年 沖縄県の戦争遺跡

生徒・学生と共に学ぶ

編集・発行:沖縄県立埋蔵文化財センター

令和元(2019)年6月

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>